

MM023『假名古事記』上中下三冊。明治七年一月發行、東京中西忠誠／甲斐内藤傳右衛門
坂田鐵安撰 [不許翻刻]『假名古事記』三卷 官許 中西忠誠 藏 内藤傳右衛門 版

あらたにゑれる か な ふることぶみ はしぶみ
新刻假名古事記の端文

これの古事記ハ天地の初發の時ゆ高天原に成坐る三神の奇き妙なる功用をあらいはし
天照大御神須佐之男命の高天原に誓約給ひし跡大國主大神の國つくりし初め最もたふと
くやごとなき御書にぞありける。此を除て他書ハあらず。かくて皇御孫命日向の高千穂
の久じ布流峰に天降まししより。白檮原大宮の神随天下所食し
天 皇の大御世より小治田朝廷に至るまで御代のありのことの神傳へに傳へ給ふ。然を
飛鳥の淨御原天 皇の厚き廣き大御心に深くいとしみ神世の御手振天下平らけて安らけく所食其
を舍人名ハ穰田阿禮に大御口づから 詔して傳へ賜ひしを和銅四年といふ季の九月に太朝臣
安萬侶に勅命して尔の阿禮がそらによみうかべたるまふを書に記さしめん賜ふて明る季の五年
正月書成て上られしなり。かくの御書大日本國乃大御民の男女の差別なく幼稚より讀覺習ひ
唄はしなバ 自ら天神地祇のいとも尊き御功績ハいふも更なり。御代の日嗣かけまくもかし
こき
天 皇の大御惠の最たふときを忘れずや有べきと僕父多治比正安おもひらくハ真假名文字もて
童蒙の學び安き一助と成なむ事を傳へまく乞のみまをす。まに恐惶も如此のものして
古語のうるはしきを桜木に載する比ハ明 治七年一月の井上正鐵翁の教子武蔵國の御民
坂田乃氏人多治比鐵安

フルコトブミカミツマキ ナラビニジヨ
古事記上卷 并序

臣安萬侶言。夫、混元既凝、氣象未効。無名無爲。誰知其形。然乾坤初分。
參神作造化之首。陰陽斯開。二靈爲群品之祖。所以出入幽顯。日月彰於洗目。
浮沈海水。神祇呈於滌身。故太素杳冥。因本教而識孕土産嶋之時。元始
綿邈。頼先聖而察生神立人之世。寔知懸鏡吐珠。而百王相續。喫劍切
蛇。以萬神蕃息。敷議安河而平天下。論小濱而清國土。是以番仁岐命。
初降于高千嶺。神倭天皇。經歷于秋津嶋。化熊出爪。天劍獲於高倉。生尾遮
徑。大鳥導於吉野。列舞攘賊。聞歌伏仇。即覺夢而敬神祇。所以稱賢后
望烟而撫黎元。於今傳聖帝。定境開邦。制于近淡海。正姓撰氏。勒
于遠飛鳥。雖步驟各異。文質不同。莫不稽古以繩風猷於既頽。照
今以補典教於欲絶。 ※「爪」ノ字、本居宣長翁、山ノ訛トシ、山田本、川ニ作レドモ、尚定メ難

暨飛鳥清原大宮。御大八洲天皇御世上。潛龍體元。洊雷應期。聞夢歌而想纂
業。投夜水而知承基。
然天時未臻。蟬蛻於南山。人事共洽。虎步於東國。皇輿忽駕。浚
渡山川。六師雷震。三軍電逝。杖矛舉威。猛士烟起。絳旗耀兵。
凶徒瓦解。未澌辰。氣滄自清。乃放牛息馬。愷悌歸於華夏。卷
旌戢戈。舞詠停於都邑。歲次大梁。月踵夾鍾。清原大宮。昇即天位。道軼

ケンコウニ トクコエ玉フ シウワウニ ニギリ ケンフヲ テ スベ リクゴウヲ エ テントウヲ テ カネタマフ ハツクワウヲ ジョウジ ジ キ ノタダシキニ
軒后。徳跨周王。握乾符而摠六合。得天統而包八荒。乘二氣之正。トノハ玉フゴキヤウ ノ ツイデフ マウケテ シムリヲ モチテススメ ソクヲ シキテ エイフウヲ モチテヒロメ玉フ クニヲ シカバナラズ チ カイコウカントシテ フカクサグリ シヤウワフ
齊五行之序。設神理以獎俗。敷英風以弘國。重加智海浩瀚。潭探上古
シンキヤウキクワウシテ アキラカニミタマフ センタイフ
心鏡焯煌。明觀先代。
コノニ テンワウミヨトバシ玉ハク チンキク シヨカ ノトコロノ モタルテイキオヨビホンジ スデニタガヒ セイジツニ オホクハフト キヨギキ アタリテ
於是天皇詔之。「朕聞『諸家之所賈帝紀及本辭。既違正實。多加虚偽。』當
イマ ノトキニ スハ アラタメ ソノシツヲ イマダ ハ イクバクノシヲ ソノムネ ス ホロビムト コレスナハチ ハウカケイキ ワウカハ ノカウキナリ
今之時。不レ改ニ其失。未ズシテ經幾年。其旨欲滅。斯乃邦家經緯。王化之鴻基
カレコレ センロクシテイキヲ タウカクシテキユウジヲ ケツリ イウハリサダメ マコトヲ ストノ玉フ ツタヘント コウエウニ トキニアリ トネリ セイハ
焉。故惟撰録帝紀。討覈舊辭。削偽定實。欲流後葉。」時有舍人。姓
ヒエダナハ アレ トシコレジフハチ ナリ ヒトソウメイニシテ ワタレバ メニヨミ クチニ フルレバ ミニシルス ココロニ スナハチチヨクシテアレニ シム
稗田名阿禮。年是廿八。爲人聰明。度目誦口。拂耳勒心。即勅語阿禮。令
ヨミ ナラハタイクハウノヒツギ オヨビセンタイノキユウジヲ シカレトモ ウンツリヨカハリテ イマダ オコナハ ソノコトヲ
誦習帝皇日繼。及先代舊辭。然運移世異。未ズ行其事矣。
フシテオモワニ クワウテイヘイカ エテ イチワクワウタクシ ツウジテ サンニテイイクシ玉フ キョ シシシニ テトクカウマリ バチイ ノトコロニ キハマル ザ ゲムコニ
伏惟。皇帝陛下。得一光宅。通三亭育。御紫宸而德被馬蹄之所。極坐玄扈
シテクワラシ玉フ セントウ ノトコロヲ ヲヨフ ヒウカビテカサネ キヲ クモチテアラズ ケフリニ ツラネ カヲアハス ホヲ ズイ シズ タニ シルス ツラネ
而化照船頭之所。日浮重暉。雲散非烟。連柯并穗之瑞。史不絶書。列
ホウワカサヌル イヤクヲ コウ フ ナシ ムナシキツキ ベシ イヒツ ナタカク プンメイヨリモ トクマサレリト テンイツニモ
烽重譯之貢。府無空月。可謂名高文命。德冠天乙矣。
ココニ ヲシミ キユウジ ノアヤマリタガヘルヲ タダサトシテ センキ ノアヤマリヤマルレヲ モチテ ワドウシネンクガハツジフハチニチヲ ミコトノリシテ
於焉。惜舊辭之誤忤。正先紀之謬錯。以和銅四年九月十八日。詔ニ
シンヤスマロニ センロクシテヒエダノアレカトコロ ヲム ノチヨクノキユウジヲ モチテケンジヤウセシムテヘリ ツツシテシタガヒ シヤウシニ シヤイニトリヒロフ シカルニ
臣安萬侶。撰録稗田阿禮所誦之勅語舊辭。以獻上者。謹隨詔旨。子細採摭。然
シヤウコノトキニ ガンキナラヒニボクシテ シキ プンワカマフル ヲ ヲイテ ジニスナハチカガシ スデニヨリテ クニニノベタルモノハ コトバズ ヲヨフ ココロニ マツタガモチテ
上古之時。言意竝朴。敷文構句。於字即難。已因訓述者。詞不逮心。全以
ボンツツラネタルモノハ コノオモキサラニナガシ コロモチイマ アルセハイチクノウチ マチヘ モチヒランクヲ アルセハイチジノウチ マツタクモテ クンヨシルス
音連者。事趣更長。是以今。或一句之中。交用音訓。或一事之内。全以訓錄。
スナハチコトバコトハリガタキハ ミエ モテ チユウワアカス キヲ イハムヤヤスキハ ワカリ サラニズ チユウセ マチニ セイノクサカ イヒクサカト ニ
即辭理互見。以注明意。况易解。更非注。亦於姓日下。謂玖沙訶。於
ナノタラシノジ イフ タラシト ゴトキカノ ルイ シタガヒテ モトニズ アラタメ タイテイコロ シルスハ ヲリ テンチノカイビヤク ハジメテ モテヲフ
名帶字。謂多羅斯。如此之類。隨本不レ改。大抵所記者。自天地開闢。始以訖
ヲハリダノミヨニ カレアメノミナカスシノカミヨリイカ ヒコナギサタケウガヤフキアヘズノミコトヨリイゼンヲ ナン カミツマキト
于小治田御世。故天御中主神以下。日子波限建鵜草葺不合命以前。爲上卷。
カムヤマトイハレビコノスメラミコトヨリイカ ホンダノミヨヨリイゼンヲ ナシ ナカツマキト オホササキノスメラミコトヨリイカ ラハリダノオホミヤヨリイゼンヲ ナス
神倭伊波禮毘古天皇以下。品陀御世以前。爲中卷。大雀皇帝以下。小治田大宮以前。爲
シモツマキト アハセテロクシ サングハンヲ ツツシテモテケンジヤウス シンヤスマロ セイクワウセイキヨフトンシユトシニシユ
下卷。并録三卷。謹以獻上。臣安萬侶。誠惶誠恐頓首頓首。
ワドウゴネンシヤウグハツニジフハチニチ シヤウゴキクタンゴトウオホノソミヤスマロツツシテタマツル
和銅五年正月二十八日。正五位勲五等太朝臣安萬侶謹上。

ふることぶみかみつまき
古事記上卷

あめつち はじめのとき たかまのはら かみ みな あめのみなかぬしのかみ つぎ たかみむすびのかみ つぎ
天地の初發之時。高天原になりませる神の御名ハ。天之御中主神。次に高御産巢日神。次
かみむすびのかみ みはしら ひとりがみ みみ つぎ くにわかくさき
に神産巢日神。この三柱の神ハ。みな獨神なりまして。御身をかくしたまひき。次に國稚浮
あぶらのごとくして くらげなす あしかび もえ
あぶらのごとくして。久羅下那洲ただよへるときに。葦牙のごと萌あがるものによりて。
かみ みな うましあしかびこぢ かみ つぎ あめのとこたちのかみ ふたはしら かみ ひとりがみ
なりませる神の御名ハ。宇麻志阿斯訶備比古遲の神。次に天之常立神。この二柱の神も獨神
なりまして。御身をかくしたまひき。
かみ くだりいしはら かみ べつあまつかみ
上の件五柱の神ハ。別天神
つぎ かみ みな くにのとこたちのかみ つぎ とよくもぬのかみ ふたはしら かみ かみ
次になりませる神の御名ハ。國之常立神。次に豐雲野神。この二柱の神もひとり神なりま
みみ つぎ かみ みな うひちにのかみ つぎ いもいくひのかみニ
して。御身をかくしたまひき。次になりませる神の御名ハ。宇比地邇神。次に妹活杵神
つぎ おほとのぢのかみ つぎ いもおほとのべのかみ つぎ おもだるのかみ つぎ いもあやかしのねのかみ つぎ
次に意富斗能地神。次に妹大斗乃辨神。次に淤母陀琉神。次に妹阿夜詞志古泥神。次に
いざなぎのかみ つぎ いもいざなぎのかみ
伊邪那岐神。次に妹伊邪那美神

かみ くにのとこたちのかみ しも いざなぎのかみ かみよななよ カミノフタハシラ
上のくだり國之常立神より以下。伊邪那美神まで。あはせて神世七代とまをす。上二柱。

ヒトリガミノハヒトマヲス ツギニナラビスタハシラハ オノハシラヲアハセテヒトマヲス
獨神各云一代。次雙十神。各合二神云一代也
あまつかみ みこと いざなぎのみこといざなぎのみことふたはしら かみ くに
ここに天神もろもろの命もちて。伊邪那岐命伊邪那美命二柱の神に。このただよへる國
のり あま ぬほこ ことよさし ふたはしら かみあま
をつくりかためなせと詔ごちて。天の沼矛をたまひて。言依たまひき。かれ二柱の神天
うきはし たた ぬほこ しほこほろこほろに
の浮橋に立して。その沼矛をさしおろしてかきたまへば。塩許袁呂許袁呂邇かきなして。ひ
ほこ さき しほ しま おのころしま しま
きあげたまふときに。その矛の末よりしただる塩。つもりて鳴となる。これ淤能碁呂嶋なり。その嶋に

あもりまし あめのみはしら みたて やひろどの み いもいざなみのみこと ながみ
天降坐て。天之御柱を見立。八尋殿を見たてたまひき。ここにその妹伊邪那美命に。汝身ハい
かになれるととひたまへば。吾身ハ成て成あはざるところ一處ありとまをしたまひき。
いざなぎのみこと あがみ なりなり なり ひところ あがみ
伊邪那岐命のりたまひつらく。我身ハ。成て成あまれるところ一處あり。かれこの吾身
の成あまれるところを。汝身の成あはざるところにさしふたぎて。國生なさむとおもふハ
いかにとのりたまへば。いざなみのみことしかよけむ いざなぎのみこと
あな あめのみはしら みとのまぐはひ いひ
バ吾と汝とこの天之御柱をゆきめぐりあひて。美斗能麻具波比せなどのりたまひき。かく言ちざり
て。すなはち汝ハ右よりめぐりあへ。あハ左よりめぐりあはむとのりたまひ。約おへてめぐ
りますときに。いざなみのみことまづ あな にやしえをとこを のち いざなぎのみこと
あなにやしえをとめをへ
阿那邇夜志愛袁登古袁とのりたまひ。後に伊邪那岐命
阿那邇夜志愛袁登賣をとのたまひき。おの／＼のりたまひ竟てのちに。その妹に。女人を
ことさき ふさはず くみどに みこひるご うみ
言先だちて不良とのりたまひき。しかれども久美度邇おこして。子蛭子を生またまひき。こ
のこあしづね あはしま うみ こ みこ
の子ハ葦船にいれてながしすてつ。次に淡島を生またまひき。是も子のかづにハいらず。こ
こにふたはしら かみ いまがうめりしふさはず あまつかみ みもと
ここに二柱の神はかりたまひつらく。今吾生所之子不良。なほ天神の御所にまをすべしと
のりたまひて。すなはちともに參上て。天神の命を請たまひき。ここに天神の命もちて。
ふとまににうら をみな ことさきす ふさはす
布斗麻邇爾トへてのりたまひつらく。女人を言先だちによりて不良。またかへりくだりて
あらためいへとのりたまひき。かれすなはちかへりくだりまして。さらにかの天之御柱を
いざなぎのみこと あなにやしえをとめを
さきのごとゆきめぐりたまひき。ここに伊邪那岐命。まづ阿那邇夜志愛袁登賣袁とのりたまひ。
のちにいもいざなみのみこと あなにやしえをとこ をへ みあひ
のち妹伊邪那美命。阿那邇夜志愛袁登古をとのりたまひき。かくのりたまひ竟て。御合
まして。みこあハちのほのさわけ しま うみ つぎ いまのふたな しま うみ しま
まして。子淡道之穗之狭別の嶋を生またまひき。次に伊豫之二名の嶋を生またまひき。この嶋
みひとつ おもよつ おもごと な いよ くに えひめ くに いひよりひこ
ハ身一にして面四あり。面毎に名あり。かれ伊豫の國を愛比賣といひ。讃岐の國を飯依比古
あハ くに おほげつひめ とさ くに たげりわけ つぎ おき みつご しま うみ
といひ。粟の國を大宜都比賣といひ。土佐の國を建依別といふ。次に隱伎の三子の嶋を生
また な あめのおしころわけ つぎ つくし しま うみ しま みひとつ おもよつ
たまふ。亦の名ハ天之忍許呂別。次に筑紫の嶋を生またまふ。この嶋も身一にして面四あ
り。面ごとに名あり。かれ筑紫の國を白日別といひ。とよくに とよびわけ ひ くに
り。豊國を豊日別といひ。肥の國を
たけひむかひとよくしひねわけ くまそ くに たげりわけ つぎ い き しま うみ また な
建日向豊久土比泥別といひ。熊曾の國を建日別といふ。次に伊伎の嶋を生またまふ。亦の名
あめ さでよりひめ つぎ さど しま うみ おほやま比とよあきつし うみ また
ハ天之狭手依比賣といふ。次に佐度の嶋を生またまふ。つぎに大倭豊秋津嶋を生またまふ。亦
のな あま みそらとよあきつねわけ やしま うみ くに
の名ハ天之御虚空豊秋津根別といふ。かれこの八嶋ぞまづ生ませる國なるによりて。
おほやまくに さてのち きび こじま うみ また な おほぬでひめ
大八嶋國といふ。然後かへりましときに。吉備の兒嶋を生またまふ。亦の名ハ大野手比賣と
つぎ おほしま うみ また な おほたまわけ つぎ ひめじま うみ また な
いふ。次に大嶋を生またまふ。亦の名ハ大野流別といふ。次に女嶋を生またまふ。亦の名ハ
あめひとつね つぎ ち か しま うみ また な あめのをしお つぎ ふたご しま うみ
天一根といふ。次に知訶の嶋を生またまふ。亦の名ハ天之忍男といふ。次に兩兒の嶋を生
また な あめふたや キビノコジマヨリアマフタヤシママデアハセテムシマ くに うみ さら かみ うみ
まふ。亦の名ハ天兩屋といふ。自吉備兒島至天兩屋島 并 六島すでに國を生おへて。更に神を生
うみ かみ みな おほことおしのかみ つぎ いハつちびこのかみ うみ いはすびめのかみ うみ つぎ
ます。かれ生ませる神の名ハ大事忍男神。次に石土毘古神を生まし。石巢比賣神を生まし。次
おほとびわけのかみ うみ つぎ おほやびこのかみ うみ つぎ かざけつわけのおしのかみ うみ つぎ
に大戸日別神を生まし。次に大屋毘古神を生まし。次に風木津別之忍男神を生まし。次に
わたのかみ な おほわたつのかみ うみ
海 神名ハ大綿津見神を生まし。
つぎ みなとのかみみな はやあきつひこのかみ つぎ いもはやあきつひめのかみ うみ オホトオシヲノカミヨリア キツヒメノカミ
次に水戸神名ハ速秋津日子神。次に妹速秋津比賣神を生まし。自大事忍男至秋津比賣神
アハセテハシラ はやあきつひこのはやあきつひめふた かみ かハうみ うみ かみ
并 十神この速秋津日子速秋津比賣二はしらの神。河海によりてもちわけて生ませる神の
みな あハなぎのかみ つぎ づらなぎのかみ つぎ づらなみのかみ つぎ あめのみくまりのかみ つぎ くにのみくまりのかみ つぎ
名ハ沫那藝神。次に類那藝神。次に類那美神。次に天之水分神。次に國之水分神。次に
あめのくひぎもちのかみ つぎ くにのくひぎもちのかみ アワナギノカミヨリクニノクヒザモチカミマデアハセテハシラつぎ かぜ かみ
天之久比奢母智神。次に國之久比奢母智神自沫那藝神至國之久比奢母智神 并 八神次に風の神
みな しなつひこのかみ うみ つぎ きかみみな くのちのかみ うみ つぎ やま かみみな
の名ハ志那都比古神を生ます。次に木の神名ハ久能智神を生ます。次に山の神名ハ
おほやまつかみ うみ つぎ ぬ かみみな かやぬひめのかみ うみ また みな ぬづちのかみ
大山津見神を生ます。次に野の神名ハ鹿屋野比賣神を生ます。亦の名ハ野椎神とまをす
シナツヒコノカミヨリヌツチマデアハセテハシラ おほやまつかみぬづちのかみふたはしら やまぬ うみ
自志那都比古神至野椎 并 四神この大山津見神野椎神二神。山野によりてもちわけて生まれ
かみ みな あめのさづちのかみ つぎ くにのさづちのかみ つぎ あめのさざりのかみ つぎ くにのさざりのかみ つぎ
る神の名ハ天之狭土神。次に國之狭土神。次に天之狭霧神。次に國之狭霧神。次に

ににげいでましき。また後にハ。かの八 雷 神に。千五百の黄泉軍をそへて。おハしめ
 き。かれ御佩る十拳劔をぬきて。後手に布伎都都にげきませるを。なほおひて。黄泉比良坂
 の坂本にいたるときに。その坂本なる。桃の子を三箇とりて。まうちたまひしかバ。こ
 とごとくににげかへりき。ここに伊邪那岐命桃子にのりたまはく。汝吾をたすけしがごと。
 葦原の中國にあらゆる宇都志伎青人草の。患瀬におちて。苦まむときに。助てよどのり
 たまひて意富加牟豆美命といふ名をたまひき。いやはてにその妹伊邪那美命。身自 おひ
 きましき。すなはち千引石を。その黄泉比良坂にひき塞て。その石を中に置いて。あひむき
 たたして。事戸をわたすときに。伊邪那美命のまをしたまはく。うつくしき我那勢命。如此
 したまはバ。汝の國の人草一日に千頭絞 殺とまをしたまひき。ここに伊邪那岐命ののり
 たまはく。うつくしき我那逆妹命。汝しかしたまハバ。吾はや一日に千五百産屋立てむ
 とのりたまひき。ここをもて一日にかならず千人死。一日にかならず千五百人なもうまる
 る。かれその伊邪那美命を。黄泉大神とまをす。またかの追斯伎斯によりて。道敷大神と
 まをすともいへり。またその黄泉坂に塞れりし石ハ。道反大神とももをし。さやります
 黄泉戸大神ともまをす。かれそのいハゆる黄泉比良坂ハ。いま出雲の國の伊賦夜坂となも
 いふ。ここをもて伊邪那岐大神ののりたまはく。吾ハ伊那志許米志許米岐穢國にいたりて
 ありけり。かれ吾ハ御身の禊せなどのりたまひて。笠紫の日向の 橋 の小門の阿波岐原にい
 でまして。禊 祓たまひき。かれ投うつる御杖になりませる神の名ハ。道之長乳齒神。つぎに投う
 つる御裳になりませる神の名ハ。時置師神。つぎに投うつる御衣になりませる神の名ハ。
 和豆良比能宇斯能神。つぎに投うつる御禪になりませる神の名ハ。道俣神。つぎに投うつる御冠
 になりませる神の名ハ。飽咋之宇斯能神。つぎに投うつる左の手の手纏になりませる神の名
 ハ。奥 疎 神。つぎに奥津那藝佐毘古神。つぎに奥津甲斐辨羅神。つぎに投うつる右の御手の
 手纏になりませる神の名ハ。邊津甲斐辨羅神。

右の件船戸神より以下。邊津甲斐辨羅神まで。十二 神ハ。身につけるものをぬぎうてたま
 ひしによりて。生ませる神なり

ここに上つ瀬ハ瀬ばやし。下つ瀬ハ瀬よわしとのりごちたまひて。はじめて中つ瀬におり
 かづきて。そそぎたまふときに。なりませる神の名ハ。八十禍津日神。つぎに大禍津日神。
 この二神ハ。かのきたなき繁國にいたりまししときのけがれによりて。なりませる神なり。つぎにその
 禍を直さむとして。なりませる神の名ハ。神直毘神。つぎに大直毘神。つぎに伊豆能賣神。つぎ
 に水底に滌たまふときに。なりませる神の名ハ。底津綿津見神。つぎに底筒之男命。中に滌た
 まふときに。なりませる神の名ハ。中津綿津見神。つぎに中筒之男命。水の上に滌たまふとき
 に。なりませる神の名ハ。上津綿津見神。つぎに上筒之男命。この三柱の綿津見神ハ。阿曇連
 らが祖神ともち伊都久神なり。かれ阿曇連ハ。この綿津見神の子。宇都志日金拆命の子孫
 なり。その底筒之男命中筒之男命上筒之男命三柱の神ハ。墨江の三前大神なり。ここに左の
 御目を洗たまひしときに。なりませる神の名ハ。月讀命。つぎに御鼻を洗たまひしときに。
 なりませる神の名ハ。建速須佐之男命。

右の件八十禍津日神より。速須佐之男命まで。十四 柱 神ハ。御身をそそぎたまふによりて
 生ませるかみなり

このとき伊邪那岐命大よろこばしてのりたまはく。吾ハ子生て。生の終に。三の貴の子
 を得たりとのりたまひて。すなはちその御頸珠の玉の緒母由良迹。とり由良迦志て。
 天照大御神にたまひてのりたまはく。汝命ハ高天原をしらせと。事依してたまひき。か

れその御頸珠の名を御倉板擧之神とまをす。つぎに月讀命にのりたまはく。汝命ハ。夜の食國をしらせと。事依たまひき。つぎに建速須佐之男命にのりたまはく。汝命ハ。海原をしらせと。事依してたまひき。かれおのも／＼よさしたまへる命のまに／＼。しろしめすなかに。速須佐之男命。よさしたまへる國をしらせずして。八拳須むなさきにいたるまで。啼伊佐知伎。そのなきたまふさまハ。青山を枯山なす泣枯し。海河ハこと／＼に泣乾き。ここをもて惡神の音なひ。狭蠅なす皆滿。よろづのものゝわぎハひこと／＼に發き。かれ伊邪那岐大神。速須佐之男命にのりたまはく。何とかも汝ハ。事依せる國を治ずて。哭伊佐知流とのりたまへば。まをしたまはく。僕ハ妣の國根の堅洲國にまからむとおもふがゆゑに哭とまをしたまひき。ここに伊邪那岐大神大いからして。しからバ汝この國にハな不可住とのりたまひて。すなはちかむやらひやらひ。いざなぎのおほかみ。あふみ。たが。まします。神夜良比に夜良比たまひき。かれその伊邪那岐大神ハ。淡海の多賀になも坐也。かれここには速須佐之男命のまをしたまはく。しからバ天照大御神にまをしてまかりなむとまをしたまひて。すなはち天に參上ますときに。山川こと／＼に動。國土みな震き。ここに天照大御神聞おどろかして。我那勢命の上りきますゆゑハ。かならず善こころならじ。我國を奪とおもほすにこそとのりたまひて。すなはち御髪をとき。御美豆羅に纏て。左右の御美豆羅にも。御鬘にも。左右の御手にも。みな八尺勾璽の五百津の美須麻流の珠を纏もたして。曾比良迹ハ千入の鞆を負。五百入の鞆を附。また伊都の竹鞆をとり佩して。弓腹ふりたてて。堅庭ハ。向股に踏なづみ。沫雪なす蹶散して。伊都の男建びふみたけびて。待間たまはく。何故のぼり來ませるとどひたまひき。ここに速須佐之男命のまをしたまはく。僕ハ邪こころなし。ただ大御神の命もちて。僕が哭伊佐知流ことをとひたまひしゆゑに。まをしつらく。僕ハ妣の國に往とおもひて哭とまをししかバ。大御神。汝ハこの國にハな不可在とのりたまひて。神夜良比夜良比たまふゆゑに。まかりなむとするさまをまをさむとおもひてこそ。參上つれ。異心なしとまをしたまへば。天照大御神。しからバ汝のこころの清明ことハ。いかにしてしましとのりたまひき。ここに速須佐之男命。おのも／＼宇氣比而。子生などまをしたまふ。かれここにおのも／＼天の安の河を中におきて。宇氣布ときに。天照大御神。まづ建速須佐之男命の佩せる十拳劔を乞わたして。三段に打をりて。奴那登母母由良爾。天之眞名井にふり滌て。佐賀美爾迦美て。吹うつる氣吹の狭霧になりませる神の御名ハ。多紀理毘賣命。またの御名ハ。奥津嶋比賣命とまをす。つぎに市寸嶋比賣命。またの御名ハ。狭依毘賣命とまをす。つぎに多岐都比賣命。速須佐之男命。天照大御神の左の御美豆羅に纏る八尺勾璽の五百津の美須麻流の珠を乞わたして。奴那登母母由良爾。天之眞名井にふりすすぎて。佐賀美爾迦美て。吹うつる氣吹の狭霧になりませる神の御名ハ。正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。また右の御みづらにませる珠を乞わたして。さがみにかみて。ふきうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名ハ。天之善卑能命また御鬘に纏る珠を乞わたして。佐賀美爾迦美而。ふきうつる氣吹のさざりになりませる神の御名ハ。天津日子根命。また左の御手にまかせる珠を乞わたして。さがみにかみて。ふきうつる氣吹のさざりになりませる神の御名ハ。活津日子根命また右の御手にまかせる珠を乞わたして。さがみにかみて。ふきうつる氣吹のさざりになりませる神の御名ハ。熊野久須毘賣命ここに天照大御神。速須佐之男命にのりたまはく。こののちに生ませる五柱の男子ハ。物實。我物によりてなりませり。かれおのづから吾子なり。さきに生ませる三柱の女子ハ。物實。汝の物によりてなりませり。かれすなはち汝の子なり。かくのりわけたまひき。かれそのさきに生ませる神。多紀理毘賣命ハ。智形の奥津宮にます。次に市寸嶋比賣命ハ。智形の中津宮にます。次に田寸津比賣命ハ。智形の邊津宮にます。この三柱の神ハ。智形の君等がも

と。族の多き少きをくらべてむ。かれ汝ハ。そのともがらのありのこと／＼く率て来て。この鳴より
 氣多の前まで。みな列伏わたれ。吾その上を踏て。はしりつつ讀わたらむ。ここに吾ともがらと孰
 多といふことをしらむ。かくいひしかバ。欺むかえて。列伏りしときに。吾その上をふみて。讀わたり
 来て。いま地におりむとするときに。吾汝ハ我にあざむかえつと言をハれば。すなはちいや端に
 伏る和邇。我を捕て。こと／＼に我衣服を剥ぎ。これによりて泣患しかバ。先だちて行ませる
 八十神の命もちて。海塩を浴て風にあたりて伏れと誨たまひき。かれ教のごとせしかバ。我身こ
 こ／＼に傷ハえつとまをす。ここに大穴牟遲神。その菟にをしへたまはく。今急この水門にゆき
 て。水もて汝身を洗て。すなはちその水門の蒲黄をとりて。敷ちらして。その上に輾轉てバ。汝身
 もとの膚の如かならずいえなむものぞとをしへたまひき。かれ教のごとせしかバ。その身もとのごと
 くになりき。これ稲羽の素菟といふものなり。いまに菟神となもいふ。かれその菟大穴牟遲神にま
 をさく。この八十神ハ。かならず八上比賣を不得。俗を負たまへれども。汝命ぞ獲たまはむとまを
 しき。ここに八上比賣。八十神に答けらく。吾ハ汝等のことハきかじ。大穴牟遲神に嫁といふ。か
 れここに八十神いかりて。大穴牟遲神を殺さむとあひたばかりて。伯伎の國の手間の山本にいた
 りていひけるハ。この山に赤猪あるなり。かれ我禮どもおひくだりなバ。汝まちとれ。もしまちとらず
 ハ。かならず汝を殺さむといひて。猪に似たる大石を火もてやきて。まろばしおとしき。かれ追くだ
 り。取ときにその石に焼著て死たまひき。ここにその御祖命泣患て。天に參上て。神産巢日之命
 にまをしたまふときに。すなはち鬺貝比賣と蛤貝比賣とを遣て。つくり活しめたまふ。かれ
 鬺貝比賣岐佐宜こがして。蛤貝比賣水もちて。母の乳汁と塗しかバ。麗しき夫になり
 て。いであるきき。ここに八十神見て。またあざむきて山に率りて。大樹をきりふせ。矢を茄
 て。その木に打たて。その中にいらしめてすなはちその冰目矢をうちはなちて。拷殺しき。かれま
 たその御祖命哭つつ求バ。見得て。すなはちその木を拆て。取いで活て。その子にのりたまは
 く。汝ここにあらバ。つひに八十神にほろぼさえなむとのりたまひて。すなはち木の國の
 大屋毘古神の御所にいそがし遣たまひき。かれ八十神覺追いたりて。矢刺ときに。木のまたより漏
 のがれて去たまひき。御祖命子にのりたまはく。須佐能男命のまします根の堅洲國にまゐてよ。
 かならずその大神議りたまひなむとのりたまふ。かれ命のまに／＼。須佐能男命の御所に參たり
 しかバ。その女須勢理毘賣いで見て目合して。相婚まして。かへりりて。その父に。いとうるは
 しき神まゐ来ましつとまをしたまひき。かれその大神いで見て。此ハ葦原色許男といふ神ぞとのり
 たまひて。即よびいれて。その蛇の室屋に寝れたまひき。ここにその妻須勢理毘賣命。蛇の
 比禮以その夫にさづけてのりたまはく。その蛇咋むとせば。このひれを三ふりて打撥ひたまへと
 のりたまふ。かれをしへのごとしたまひしかバ。蛇おのづからしづまりしゆゑに。やすく寝て出たま
 ひき。また来る日の夜ハ。呉公と蜂との室に入たまひしを。また呉公蜂の比禮をさづけて。先のご
 とをしへたまひしゆゑに。平て出たまひき。また鳴鏑を大野の中に射入れて。その矢をとらした
 まふ。かれその野に入ますときに。すなはち火もてその野を焼めぐらしつ。ここに出む所をしらざる
 あひだに。鼠来ていひけるハ。内ハ富良富良。外ハ須夫須夫。かくいふゆゑに。其處を踏しか
 バ。落り隠し間に。火ハ焼過ぬ。ここにその鼠かの鳴鏑を咋もちいで来て。たてまつりき。その
 矢の羽ハ。その鼠の子どもみな喫たりき。ここにその妻須勢理毘賣ハ。= (來ヒ) 具ものをもちて。
 哭つつ来まし。その父の大神ハ。すでに死ぬとおもほして。その野にいでたせバ。すなはちか
 の矢もちてたてまつるときに。家に率りて。八田間の大室屋によびいれて。その頭の虱をと
 せたまひき。かれそのみかしらを見れば。呉公多かり。ここにその妻。牟久の木の實と赤土とを。
 その夫にさづけたまへバ。その木の實を咋やぶり。赤土を捨て。唾いだしたまへバ。その大神。

むかで くひ つばき みこころ はしく みね おほかみ みかみ
 呉公を昨やぶりて。唾いだすとおもほして。心 に愛おもほして。寝ましき。ここにその大神の 髪
 を握て。その室屋の椽ごとに結つて。五百引石を。その室の戸にとり塞て。その妻須勢理毘賣
 を負て。その大神の生太刀生弓矢。またその天の詔琴をとりもたして。逃出ますときに。その天の
 のりこと樹に拂て。地動鳴。かれその寝ませる大神。聞をどろかして。その室屋をひき仆たまひ
 き。しかれども椽に結る髪をとかす間に。遠くにげたまひき。かれここに黄泉比良坂までおひい
 でまして。遙 に望て。大穴牟遲神を呼てのりたまはく。その汝がもたる生太刀生弓矢をもち
 て。汝が庶兄弟どもをバ。坂の御尾におひふせ。河の瀬におひはらひて。意禮大國主神となり。
 また宇都志國玉神となりて。その我女須勢理毘賣を嫡妻として。宇迦能山の山本に。底津石根
 に。宮柱布刀斯理高天原に。氷椽多迦斯理て居。是奴よとのりたまひき。かれその大刀弓をもち
 て。かの八十神をおひさくるときに。坂の御尾ごとにおひふせ。河の瀬ごとにおひはらひて。國つ
 くりはじめたまひき。かれその八上比賣ハ。先のちぎりのごと。美刀阿多波志都。かれその八上
 比賣ハ。率來ましつれども。かの嫡妻須勢理毘賣を畏て。その生ませる子をバ。木の俣にさし
 はさみて。返りましき。かれその子の名を木俣神とまをす。またその名ハ御井神とまをす。この
 八千矛神。高志の國の沼河比賣を婚ひにいでましとき。その沼河比賣の家にいたりて。歌ひたま
 はく。やちほこの。かみのみことハ。やしまくに。つままぎかねて。とほとほし。こしのくにに。さかし
 めを。ありときかして。くはしめを。ありときこして。さよばひに。ありたし。よばひに。ありかよはせ。
 たちがをも。いまだとかずて。をすひをも。いまだとかねバ。をとめの。なすやいたとを。おそぶら
 ひ。わがたたせれば。ひこづらひ。わがたたせれば。あをやまに。ぬえハなき。さぬつとり。きぎし
 ハとよむ。にはつとり。かけハなく。うれたくも。なくなるとりか。このとりも。うちやめこせぬ。いしたふ
 や。あまはせづかひ。ことの。かたりごとも。こをバ。爾にその沼河比賣。いまだ戸をひらかすで。
 内より歌ひたまはく。やちほこの。かみのみこと。ぬえくさの。めにしあれば。わがこころ。うらすのと
 りぞ。いまこそハ。ちどりにあらめ。のちハ。などりにあらむを。いのちハ。なしせたまひそ。いした
 ふや。あまはせづかひ。ことの。かたりごとも。こをバ。あをやまに。ひがかくらバ。ぬばたまの。よハ
 いでなむ。あさひの。ゑみさかえきて。たくづぬの。しろきただむき。あわゆきの。わかやるむねを。
 そだたき。たたきまながり。またまで。たまでさしまき。ももながに。いはなきむを。あやに。なこひき
 こし。やちほこの。かみのみこと。ことの。かたりごとも。こをバ。かれその夜ハ。不台て。明日の夜
 御合したまひき。またその神の嫡后須勢理毘賣命。甚嫉妬したまひき。かれその日子遲神
 和備豆。出雲より。倭の國に上りまさむとして。装束し立すときに。片御手ハ。御馬の鞍にかけ。
 片御足その御鐙に蹈いれて。歌ひたまはく。ぬばたまの。くろきみけしを。まつぶさに。とりよそ
 ひ。おきつとり。むなみるときに。はたたぎも。これハふさはず。へつなみ。そにぬぎうて。そにどり
 の。あをきみけしを。まつぶさに。とりよそひ。おきつとり。むなみるときに。はたたぎも。こもふさは
 す。へつなみに。そにぬぎうて。やまがたに。まぎし。あたねつき。そめきがしるに。しめころもを。
 まつぶさに。とりよそひ。おきつとり。むなみるときに。はたたぎも。こしよろし。いとこやの。いものみ
 こと。むらどりの。わがむれいなバ。ひけどりの。わがひけいなバ。なかじとハ。なはいふとも。やまと
 の。ひともとすすき。うなかぶし。ながなかさまく。あさあめの。さぎりに。たたむぞ。わかくさの。つま
 のみこと。ことの。かたりごとも。こをバ。ここにその後。大御酒杯をとらして。立より指擧て。歌ひた
 まはく。やちほこの。かみのみことや。あがおほくに。ぬしこそハ。をにいませバ。うちみる。しまのさ
 きざき。かきみる。いそのさきおちらず。わかくさの。つまもたせらめ。あハもよ。めにしあれば。なをき
 て。をハなし。なをきて。つまハなし。あやかきの。ふはやがしたに。むしぶすま。にこやがしたに。
 たくぶすま。さやぐかしたに。あわゆきの。わかやるむねを。たくづぬの。しろきただむき。そだた

き。たたきまながり。またまで。たまでさしまき。ももながに。いをしなせ。とよみき。たてまつらせ。か
く歌ひて。すなはち。宇伎由比して。宇那賀氣理弓。いまにいたるまで鎮り坐也。これを神語とい
ふ。かれこの大國主神。甕形の奥津宮に坐神。多紀理毘賣命に娶て。生ませる子。
阿遲鉏高日子根神。つぎに妹高比賣命。またその名ハ下光比賣命。この阿遲鉏高日子根神ハ。
いま迦毛大御神とまをす者なり。大國主神。また八嶋牟遲能神の女鳥耳神に娶て。生ませる
子。鳥鳴海神。この神。日名照額田毘道男伊許知邇神に娶て。生ませる子。國忍富神。この神。
葦那陀迦神。亦の名ハ。八河江比賣に娶て。生ませる子。速甕之多氣佐波夜遲奴美神。この
神。天之甕主神の女。前玉比賣に娶て。生ませる子。甕主日子神。この神。淤迦美神の女。
比那良志毘賣に娶て。生ませる子。多比理岐志麻流美神。この神。比比羅木之其花麻豆美神
の女。活玉前玉比賣神に娶て。生ませる子。美呂浪神。この神。敷島主神の女。
青沼馬沼押比賣に娶て。生ませる子。布忍富鳥鳴海神。この神。若晝女神に娶て。生ませる
子。天日腹大科度美神。この神。天狹霧神の女。遠津待根神に娶て。生ませる子。
遠津山岬多良斯神

右の件八嶋士奴美神より以下。遠津山岬帶神まで。十七世神といふ。
かの大國主神。出雲の御大之御前に坐とときに。波の穂より。天の羅摩の船にのりて。鵜の皮を
内剥にはぎて。衣服にして。歸來る神あり。かれその名を問すれども答へずまた從所の諸神に問
すれども。みなしらずとまをしき。ここに多邇具久まをさく。こハ久延毘古ぞかならず知りたまを
せば。すなはち久延毘古をめて。問すときに。こハ神産巢日神の御子。少名毘古那神なりとまを
しき。かれここに神産巢日御祖命にまをしあげしかバ。こハ實に我子なり。子の中に。我手僕より
久岐斯子なり。かれ汝葦原色許男命と。兄弟となりて。その國つくりかためよとのりたまひき。か
れそれより。大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神。あひならばして。この國つくりかためたまひき。然
のちにハ。その少名毘古那神ハ。常世の國にわたりましき。かれその少名毘古那神をあらはしま
をせりし。いはゆる久延毘古ハ。いまに山田の曾富騰といふものなり。この神ハ。足ハ不行ども。
天の下のことをこと／＼に知れる神になもありける。ここに大國主神うれひまして。吾ひとりして何
でかもこの國を得つくらむ。いづれの神とともに吾ハこの國をあひつくらましのりたまひき。このと
きに。海ばらを光して。依來る神あり。その神ののりたまはく。我前をよく治てバ。吾ともどもに
相作り成てむ。もししからずハ。國成かてましのりたまひき。かれ大國主神まをしたまはく。しから
バ。治まつらむ狀ハいかにぞとまをしたまへバ。吾をバも。倭の青垣東の山の上に伊都岐まつれ
とのりたまひき。こハ御諸の山の上に坐神なり。かれその大年神。神活須毘神の女。伊怒比賣に
娶て。生ませる子。大國御魂神。つぎに韓神。つぎに曾富理神。つぎに白日神。つぎに聖神
また香用比賣に娶て。生ませる子。大香山戸臣神。つぎに御年神。また天知迦流美豆比賣に
娶て。生ませる子。奥津日子神。つぎに奥津比賣命。またの名ハ大戸比賣神。此ハ諸人のもち
拝く籠の神なり。つぎに大山咋神。またの名ハ山末之大主神。この神ハ。近淡海の國の日枝の山
に坐。また葛野の松尾に坐。鳴鏑に用ませる神なり。つぎに波比岐神。つぎに香山戸臣神。つぎ
に羽山戸神。つぎに庭高津日神。つぎに大土神。またの名ハ土之御祖津日神
上の件大年神の子。大國御魂神より以下大土神まで。あはせて十六神。

羽山戸神。大氣都比賣神に娶て。生ませる子。若山咋神。つぎに若年神。つぎに妹
若沙那賣神。つぎに彌豆麻岐神。つぎに夏高津日神。またの名ハ夏之賣神。つぎに秋毘賣神。
つぎに久久年神。つぎに久久紀若室葛根神。
上の件羽山戸神の子。若山咋神より以下若室葛根神まで。あはせて八神

あまてらすおほみかみ みこと とよあしはら ちあきのながいほあき みつほ くに あがみ こまさかあかつかはりやひ
天照大御神の命もちて。豊葦原の。千秋長五百秋の水穂の國ハ。我御子正勝吾勝勝速日
あめのおしほみのみこと しらさむくに こと あまくだし あめのおしほみのみこと あま うきはし
天忍穗耳命の知所國と。言よさしたまひて。天降たまひき。ここに天忍穗耳命。天の浮橋に
た た し とよあしはら ちあき ながいほあき みつほ くに いたくきやきて
多多志て。のりたまはく。豊葦原の。千秋の長五百秋の水穂の國ハ。伊多久佐夜藝弓ありけりと。
のりたまひて。さらにかへり上して。天照大御神にまをしたまひき。かれ高御産巢日神天照大御神
みこと あま やす かへ かへら やほよろづ かみ かむつどへ おもひかねのかみ
の命もちて。天の安の河の河原に。八百萬の神を神集につどへて。思金神におもはしめ
あしはら なか くに あがみ こ しらさむくに くに
てのりたまはく。この葦原の中つ國ハ。我御子の知所國と。ことよさしたまへる國なり。かれこ
くに とはやぶるあらぶるにつかみ さハ いづれ かみ ことむけ
の國に道速振荒振國神どもの多なるとおもほすハ。何の神をつかはしてか。言趣ましとのり
たまひき。ここに思金神また八百萬神たち。議て。天菩比神。是つかはしてむとまをし
あめのおほみかみ おほくにぬしのかみ こび みとせ なる かへり
き。かれ天菩比神をつかはしつれば。やがて大國主神に媚つきて。三年に至まで。復ことま
たかみむすびのかみあまてらすおほみかみ もろへ かみ あしはら なか くに
をさざりき。ここをもて高御産巢日神天照大御神。また 諸の神たちにたまはく。葦原の中つ國
あめのおほみかみ かへり いづれ かみ つかは えけむ
につかはせる天菩比神。ひさしく復ことまをさず。また何の神を使してバ吉。ここに
おもひかねのかみ あまつくにたまのかみ みこ あめわかひこ
思金神まをしけらく。天津國玉神の子。天若日子をつかはしてむとまをしき。かれここに天の
まかこゆみ あめ はは や あめわかひこ たま あめわかひこ かのくに
麻迦古弓。天の波波矢を。天若日子に賜ひて。つかはしき。ここに天若日子。其國にくだりつき
おほくにぬしのかみ むすめ したてるひめ くに えむ やとせ なる
て。すなはち大國主神の女。下照比賣を娶とし。またその國を獲とおもひはかりて。八年に至ま
かへり あまてらすおほみかみ たかみむすびのかみ もろへ かみ とひ
で。復ことまをさざりき。かれここに天照大御神高御産巢日神。また 諸の神たちに問たまはく。
あめわかひこ かへり かみ あめわかひこ ひさ
天若日子ひさしく復ことまをさず。またいづれの神をつかはしてか。天若日子が久しくとどまる
とひ もろへ かみ おもひかねのかみ きぎしななきめ
ゆゑをとはしめむと問たまひき。ここに 諸の神たち。また思金神まをさく。雉名鳴女を
つかはしてむとまをすときに。のりたまはく。汝ゆきて。天若日子に問むさまハ。汝を葦原
なかづくに くに あらぶるかみ ことむけやハ なぞやとせ かへり
の中國につかはせるゆゑハ。その國の荒振神どもを言趣和せとなり。何八年になるまで。復こ
ななきめあめ あめわかひこ かど ゆつかつら
とまをさざるととへのりたまひき。かれここに鳴女天よりくだりつきて。天若日子が門なる湯津楓の
うへ あ まつがさ あまつかみ おほみこと のり あま さぐめ とり きき あめわかひこ
上に居て。委に天神の詔命のごと言き。ここに天の佐具賣。この鳥のいふことを聞て。天若日子
とり なくこゑ あし いころし あめわかひこ あまつかみ
に。この鳥ハ。其鳴音いと悪。かれ射殺たまひねといひすすむれば。すなはち天若日子。天神
たまへ あめ はしゆみ あめ かく や きぎし いころし や きぎし むね とほ
の賜る天の波士弓。天の加久矢をもちて。この雉を射殺つ。ここにその矢。雉の胸より通りて。さ
いあげ あめ やす かへ かへら あまてらすおほみかみ たかぎのかみ みもと
かさまに射上らえて。天の安の河の河原にまします。天照大御神。高木神の御所にいたりき。
このたかぎのかみ たかみむすびのかみ また みな たかぎのかみ や み
是高木神ハ。高御産巢日神の別の名なり。かれ高木神。その矢をとらして見そなはすれば。その
や は ち たかぎのかみ や あめわかひこ たま や
矢の羽に血つきたりき。ここに高木神。この矢ハ。天若日子に賜へりし矢ぞかしとのりたまひて。も
かみ あめわかひこ みこと あらぶるかみ い
ろ／＼の神たちにみせて。のりたまへらくハ。もし天若日子。命をたがへず。惡神を射たり
や きつる あめわかひこ あた きたなき あめわかひこ や まがれ
し矢の至ならば。天若日子に中らざれ。もし邪こころしあらバ。天若日子。この矢に麻賀禮とのり
や や あな つき あめわかひこ あぐら ね
たまひて。その矢をとらして。その矢の穴より。衝かへしたまひしかバ。天若日子が。胡床に寝たる
たかむなさか あたり みうせ きぎし ことわざ きぎし ひたつかひ もと
高曾坂に中て。死にき。またかの雉かへらず。かれいまに 諺に。雉の頓使といふ本これなり。
あめわかひこ め したてるひめ なか こゑ かぜ むたひきき あめ あめなるあめわかひこ ちち
かれ天若日子が妻下照比賣の哭せる聲。風の與響て。天にいたりき。ここに天在天若日子が父。
あまつくにたまのかみ め こどもきき き なきかなしみ そ こ や かへり
天津國玉神。またその妻子聞て。くだり来て。哭悲て。すなはち其處に喪屋をつくりて。河鴈を
きまり きぎし ははき そに みけびと すめ うすめ きぎし なきめ
岐佐理もちとし。鷺を掃もちとし。翠鳥を御食人とし。雀を確女とし。雉を哭女とし。かくれおこな
さだめ ひ や かよ や あぢきたかひこねのかみ き あめわかひこ も
ひ定て。日八日夜八夜をあそびたりき。このとき阿遲志貴高日子根神到まして。天若日子が喪を
とぶ あめ あめわかひこ ちち め なき あがこ しなす
吊らひたまふときに。天よりくだりきつる。天若日子が父またその妻。みな哭て。我子ハ不死てあり
あがきみ し まし てあし なきかなしみ あやまで ふたはしら
けり。我君ハ死なずて坐けりといひて。手足にとりかかりて。哭悲き。その過るゆゑハ。この二柱
かみ かほ に
の神の容姿。いとよく似たり。かれここをもてあやまてるなりけり。ここに
あぢきたかひこねのかみいたく あ とほも き なに あれ
阿遲志貴高日子根神大いかりていひけらく。我ハうるはしき友なれこそ弔ひ來つれ。何とかも吾
しにびと みはか とつかつるぎ もや あし くゑはなち
をきたなき死人になぞふるといひて。御佩せる十掬劍をぬきて。その喪屋をきりふせ。足もて蹶離
みぬ くに あぬみがハ かハかみ もやま もち たち な
やりき。こハ美濃の國の藍見河の河上なる。喪山といふやまなり。その持てきれる大刀の名

おほぼかり 　な 　かむどのつるぎ 　あぢしきたかひこねのかみ 　おもほでり
ハ。大量といふ。またの名ハ神度劔ともいふ。かれ阿遲志貴高日子根神ハ。忿 てとびさり
たまふときに。その伊呂妹高比賣命。その御名をあらあさむとおもひて。歌ひけらく。あめなるや。
おとたなばたの。うながせる。たまのみすまる。みすまゐに。あなだまはや。みたに。ふたわたら
す。あぢしき。たかひこねの。かみぞや。このうたハ。夷ぶりなり。ここに天照大御神ののりたまは
く。亦いづれの神をつかはしてバ吉。かれ思 金 神また 諸 の神たちまをしけらく。天の安の河の
河上の天の石屋に坐。名ハ伊都之尾羽張神。これつかはすべし。もしまたこの神ならずハ。その
神の子建御雷之男神。これつかはすべし。まづその天尾羽張神ハ。天の安の河の水をさかさまに
塞上て。道をせき居バ。他 神ハ得ゆかじ。かれ別に天迦久神をつかはして。問べしとまをしき。か
れここに天迦久神をつかはして。天尾羽張神に問ときに恐し。つかへまつらむ。しかれども。この
道にハ。僕子建御雷之男神をつかはすべしとまをして。すなはち 貢 ぎ。かれ天鳥船神を。
建御雷神に副てつかはしき。ここをもてこの二はしらの神。出雲の國の伊那佐の小濱にくだりつき
て。十掬劔をぬきて。浪の穂にさかさまにさしたてて。その劔さきにあぐみあて。その大國主神に問たま
はく。天照大御神高木神の命もちて。間につかはせり。汝が宇志波祁流。葦原の中つ國ハ。我
御子のしらすむ國と。言依したまへり。かれ汝ころろいかにぞとひたまふときに。答まつらく。僕ハ
得まをさじ。我子八重言代主神。これをまをすべきを。鳥のあそび魚どりにしに。御大のさきにゆき
て。いまだかへりこずとまをしき。かれここに天鳥船神をつかはして。八重事代主神をめし來て。
問たまふときに。その父の大神に。かしこし。この國ハ。天神の御子にたてまつりたまへといひて。
すなはちその船をふみかたぶけて。天の逆手を。青柴垣に打なして。かくりましき。かれここにそ
の大國主神に問たまはく。いま汝子事代主神。かくまをしぬ。またまをすべきありやととひたまひ
き。ここにまたまをしつらく。また我子建御名方神あり。これを除てはなし。かくまをしたまふをりし
も。その建御名方神。千引石を。手末に撃て來て。たれぞ我國に來て。忍びしぬびかく物言。し
からバ力くらべせむ。かれ我まづその御手をとらむといふ。かれその御手をとらしむれば。すなは
ち立氷にとりなし。また劔刃にとりなしつ。かれ懼 てしりぞきを。ここにその建御名方神の手をと
らむと。乞歸てとれば。若葦をとるがごと。掬 批てなげはなちたまへバ。すなはちにげ去き。かれ
追ゆきて。科野の國の洲羽の海にせめいたりて。殺 としたまふときに。建御名方神まをしつらく。
恐し。我な殺たまひそ。この地を除てハ。他とほころにゆかじ。また我父大國主神の命にたがはじ。
八重事代主神の言にたがはじ。この葦原の中つ國ハ。天神の御子の命のまに／＼たてまつらむ
とまをしたまひき。かれさらにまたかへり來て。その大國主神に問たまはく。汝子ども。事代主神。
建御名方神二神ハ天神の御子の命のまに／＼。たがはじとまをしぬ。かれ汝ころろいかにぞと
ひたまひき。ここにこたへまつらく。僕が子ども二神のまをせるまに／＼。僕もたがはじ。この葦原
の中つ國ハ。命のまに／＼すでにたてまつらむ。ただ僕住所をバ。天神の御子の天津日繼り
しめさむ。登陀流天の御巢如て。底津石根に。宮柱布斗斯理。高天原に。氷木多迦斯理て。治
たまはバ僕ハ。百たらず八十垧手にかくりて侍 なむ。また僕が子ども。百八十神ハ。
八重事代主神。神の御尾前となりて。仕まつらバ。たがふ神ハあらじ。かくまをして。乃 隱 也 故
白 而 隨 出雲の國の多藝志の小濱に。天の御舎をつくりて。水戸の神の孫。櫛八玉神を膳夫と
して。天の御饗 たてまつるときに。禱まをして。櫛八玉神鵲に化て。海の底にいりて底の波瀬
を啖いでて。天の八十垧良迦をつくりて。海布柄を鎌て。燧白につくり。海蓐の柄を燧杵につくり
て。火を鑽いでてまをしけらく。この我燧る火ハ。高天原にハ。神産巢日御祖命の登陀流天の
新巢の凝烟の。八拳垂まで燒擧。地の下ハ。底津石根に燒こらして。栲繩の千尋繩打延。釣せる
海人が。大口の尾翼鱸。佐和佐和邇控よせあげて。打竹の登遠登遠登遠に。天の眞魚咋たてま

つらむとまをしき。かれ建御雷神。かへり參のぼりて。葦原の中つ國言向和平さまをまをしたまひき。ここに天照大御神高木神の命もちて。太の子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命にのりたまはく。いま葦原の中つ國ことむけ訖ぬとまをす。かれ言よさしたまへりしまに／＼。降ましてしろしめせとのりたまひき。ここにその太の子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命のまをしたまはく。僕ハ。くだりなむよそひ。みこあれ。みな。あめにきしくににぎしまつひだかひこほのににぎのみこと。みこ。くだす。装束せしほどに。子生まれつ。名ハ天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命。この子を降べしとまをしたまひき。この御子ハ。高木神の女。萬幡豊秋津師比賣命に御合まして。生ませる子。あめのほかりのみこと。ひこほのににぎのみこと。にます。天火明命。つぎに日子番能邇邇藝命に也。ここをもてまをしたまふまに／＼。日子番能邇邇藝命に詔おほせて。この豊葦原の水穂國ハ。汝しらさむ國なりと。言よさしたまふ。かれみことのまに／＼天降ますべしとのりたまひき。ここに日子番能邇邇藝命。天降まさむとするときに。天の八衢に居て。上ハ高天原を光。下ハ葦原の中つ國を光す神。ここにあり。かれ天照大御神高木神の命もちて。天宇受賣神に。汝ハ手弱女人にあれども。伊牟迦布神と。おもかつかみ。いまし。とは。あがみ。こ。あもり。天降まさむとする道を。誰ぞかくて居ととへと面勝神なり。かれもはら汝ゆきて問むハ。吾御子の天降まさむとする道を。誰ぞかくて居ととへとりのりたまひき。かれ問せたまふときに。答まをさく。僕ハ國神。名ハ狹田毘古神なり。出居ゆゑハ。天神の御子天降坐と聞つるゆゑに。御前に仕奉として。參むかへ侍ぞとまをしたまひき。ここに天兒屋命。布刀玉命。天宇受賣命。伊斯許理度賣命。玉祖命。あはせて五伴の緒を。支くはへて。天降まさしめたまひき。ここにかの遠岐斯八尺の勾璣鏡。また草那藝の劔。また常世の思金神。手力男神。天石門別神を副たまひてのりたまへらくハ。これの鏡ハ。もはら我御魂として。吾前を拝がごと。伊都岐奉れ。つぎに思金神ハ。前のことをとりもちてまをしたまへとのりたまひき。この二柱の神ハ。佐久久斯呂伊須受能宮に拝まつる。つぎに登由宇氣神。こハ外宮の度相に坐神なり。つぎに天石戸別神。またの名ハ櫛石窻神とまをし。またの名ハ豊石窻神ともまをす。この神ハ。御門の神なり。つぎに手力男神ハ。佐那縣に坐り。かれその天兒屋命ハ中臣連等之祖布刀玉命ハ忌部首等之祖天宇受賣命ハ狹女君等之祖。いしこりどめのみこと。カガツクリノムラジラガオヤ。たまのやのみこと。タマノキムラジラガオヤナリ。あまつひこほのににぎのみこと。伊勢許理度賣命ハ鏡作連等之祖玉祖命ハ玉祖連等之祖。かれここに天津日子番能邇邇藝命。あま。い。は。くら。あ。め。や。へ。た。な。ぐ。も。い。つ。の。ち。わ。き。ち。わ。き。て。あ。め。う。き。し。天の石位をはなれ。天の八重多那雲をおしわけて。伊都能知和岐知和岐豆。天の浮橋に。うきじまり。そりたたして。竺紫の日向の。高千穂の久士布流多氣に天降ましき。かれここに天忍日命。天津久米命二人。天の石靴をとりおひ。頭椎の大刀を取佩。天の波士弓を取もち。天の眞鹿兒矢を手挾。御前にたたして。仕奉き。かれその天忍日命此者大伴連等之祖。あまつくめのみこと。コハクメノアタハラガオヤナリ。そじし。からくに。か。さ。さ。み。さ。き。ま。ぎ。天津久米命此者久米直等之祖也ここに向の韓國を笠沙の御前に眞來とほりてのりたまはく此地ハ朝日の直刺國。夕日の日照國なり。かれ此地ぞ甚吉地とのりたまひて。底津石根に。みやばしらふとしり。たかまのほら。ひぎ。た。か。し。り。あ。め。の。う。ず。め。の。み。こ。宮柱布斗斯理。高天原に。氷椽多迦斯理てましましき。かれここに天宇受賣命にのりたまはく。



この御前にたちてつかへまつれりし。狹田毘古大神をバ。もはらあらはしまをせる汝。おくり奉。またその神の御名ハ。汝負てつかへ奉とのりたまひき。ここをもて狹女君ら。そのさるたびこのをがみ。みな。おひ。を。みな。さるめのみき。よ。狹田毘古男神の名を負て。女を狹女君と呼ことこれなり。かれその狹田毘古神阿邪訶に坐けるときに。漁して。ひらぶかひ。て。くひあはさ。うしほ。おほれ。比良夫具に。その手を咋合見て。海塩に溺たまひき。かれその底に沈居たまふとよきの名を。底度久御魂とまをし。その海水の都夫多都とよきの名を。都夫多都御魂とまをし。その阿和佐久とよきの名を。阿和佐久御魂とまをす。ここに狹田毘古神をおくりて。まかりいたりて。すなはちこと／＼に鱗の廣もの鱗の狭ものを追あつめて。汝ハ天神の御子につかへまつらむ耶と問ときに。もろ／＼の魚ども。みなつか

へまつらむとまをす中に。海鼠^{なかに}まをさず。かれ天宇^こ受賣^{あめのうずめのみこと}命。海鼠^こにいひけらく。この口^{くち}や。こたへせぬ口^{くち}といひて。紐^{ひも}小刀^{がたな}もちて。その口^{くち}をさきき。かれいまに海鼠^この口^{くち}さけたり。ここをもて御世^{みよ}。嶋^はの速^{はや}贄^{にへ}たてまつれるときに。猿女^{さるめ}の君^{きみ}らにたまふなり。ここに天津日高日子^{あまつひだかひこ}番能^{ほの}邇^に藝^ぎ命^{のみこと}。笠沙^{かささ}の御前^{みさき}に。麗美人^{かほよきをとめ}のあへるに。誰^たが女^{むすめ}ぞとどひたまひき。こたへまをしたまはく。大山津見神^{おほやまつみのかみ}のむすめ。名^なハ神阿多都比賣^{なにかむあたつひめ}。またの名^なハ木花之佐久夜毘賣^{このはなのさくやびめ}とまをしたまひき。また汝^{いまし}が兄弟^{はらから}ありやとどひたまへば。我^あ姉^あ石長比賣^{ちちおほやまつみのかみ}ありとまをしたまひき。かれのりたまはく。吾^{あいまし}汝^{まぐはひ}に目^ま合せむとおもふ^あいかにと^あのりたまへば^あ僕^あ得^あまをさじ。僕^あが父^あ大山津見神^{ちちおほやまつみのかみ}ぞまをさむとまをしたまひき。かれその父^{ちち}大山津見神^{おほやまつみのかみ}に乞^{こひ}につかはしけるときに。大^{いたく}よろこびて。その姉^{あね}石長比賣^{いはながひめ}を^{そへ}副^{つく}て。百^{もも}とりの机^{つく}代之物^{えしろのもの}をもたしめて。奉^{たて}出^だす。かれここにその姉^{あね}ハ。いと凶醜^{みにくき}によりて。見^みかしこみて。返^{かへ}しおくりたまひす。ただその弟^{おとこ}木花之佐久夜毘賣^{このはなのさくやびめ}をのみとどめて。一宿^{ひとよ}婚^{よめ}あたはしつ。ここに大山津見神^{おほやまつみのかみ}。石長比賣^{いはながひめ}を返^{かへ}したまへるによりて。大^{いたく}はちて。まをしおくりたまひける言^{こと}ハ。我が女^あふたりならべてたてまつれるゆゑ^あハ。石長比賣^{いはながひめ}をつかはして^あば。天神^{あまつかみ}の御子^{みこ}の命^{のみこと}ハ。雪^{ゆき}ふり風^{かぜ}ふけども。恒^{とこしへ}なる石^いのごとく。常^{とこ}はに堅^{かき}はにまします。また木花之佐久夜毘賣^{このはなのさくやびめ}をつかはして^あば。木花之榮^{このはなのさか}ゆるがごと。さかえませと。宇氣比豆^{うけひて}たてまつりき。かかるに今^{いま}石長比賣^{いまいはながひめ}を返^{かへ}して。木花之佐久夜毘賣^{このはなのさくやびめ}ひとりとどめたまひつれば。天神^{あまつかみ}の御子^{みこ}の御壽^{みいのち}ハ。木花^{このはな}の阿摩比能^{あまひのみまし}微^か坐^{かれ}なむとすとまをしたまひき。故^{すめらみこと}ここをもていまにいたるまで。天皇命^{みみのち}たちの御命^あながく^あはまさざるなり。かれ後^{のち}に木花之佐久夜毘賣^{このはなのさくやびめ}。まゐでてまをしたまはく。妾^あはらめるを。いま産^{うま}べきときになりぬ。この天神^{あまつかみ}の御子^{みこ}。わたくしに産^うまつるべきにあらずかれをまをすとまをしたまひき。かれのりたまはく。佐久夜毘賣^{さくやびめ}。一夜^{ひとよ}にや妊^{はら}む。そハ我^{あが}子^{みこ}にあらじ。かならず國神^{くにつかみ}の子^こにこそあらめとのりたまへば吾^あはらめる子^こ。もし國神^{うむ}の子^{さき}ならむにハ。産^{あまつかみ}こと幸^なからじ。もし天神^{あまつかみ}の御子^{みこ}にまさば。幸^{さき}からむとまをして。戸^となき八尋^{やひろ}殿^{どの}をつくりて。その殿内^{はに}にいりまして。土^{はに}もて塗^ぬりふたぎて。産^{うま}すときにあたりて。その殿^{どの}に火^ひをつけてなも産^{うま}しける。かれその火^ひの盛^{まさ}に焼^{かり}るときに。生ませる子^あの名^なハ。火照^{ほでりのみこと}命^{のみこと}。此^こ者^ハ阿多君^{コハアタノキミノオヤ}之^ノ祖^ヲつぎに生ませる子^あの名^なハ。火須勢理^{ほすせりのみこと}命^{のみこと}。つぎに生ませる子^あの名^なハ。火遠^{ほをりのみこと}理^り命^{のみこと}。またの名^なハ天津日高日子^{あまつひだかひこ}穗穗^{ほほ}手^て見^み命^{のみこと}。かれ火照^{ほでりのみこと}命^{のみこと}ハ。海^{うみ}佐^さ知^ち毘^び古^ことして。鱈^{はた}の廣^{ひろ}もの鱈^{はた}の狭^さものをとりたまひ。火遠^{ほをりのみこと}理^り命^{のみこと}ハ。山^{やま}佐^さ知^ち毘^び古^ことして。毛^けの麤^{あら}もの毛^けの柔^なものをとりたまひき。ここに火遠^{ほをりのみこと}理^り命^{のみこと}。その兄^{いろせ}火照^{こひはたり}命^{のみこと}に。各^{いろと}に佐^と知^{かつ}を相^ぎ易^ぎてもちいひてむといひて。三^{みた}度^び乞^こしかども。ゆるさざりき。しかれどもつひにわづかに得^えかへたまひき。かれ火遠^{ほをりのみこと}理^り命^{のみこと}。海^{うみ}佐^さ知^ちをもちて。魚^{うみ}つりに。かつて一^{ひと}魚^つ得^えたまはず。またその鉤^{つり}はりをさへ海^{うみ}にうしなひたまひき。ここにその兄^{いろせ}火照^{こひはたり}命^{のみこと}。その鉤^{つり}を乞^{こひ}て。山^{やま}佐^さ知^ちも。己^{おの}がさち^{さち}／＼。海^{うみ}佐^さ知^ちも。己^{おの}がさち^{さち}／＼。いまハおの^{さち}／＼佐^{さち}知^ち返^{かへ}さむといふときに。その弟^{いろと}火遠^{ほをりのみこと}理^り命^{のみこと}のりたまはく。汝^{いまし}の鉤^{つり}ばりハ。魚^なつりに。一^{ひと}魚^つも得^えず。つひに海^{うみ}にうしなひてきとのりたまへども。その兄^{いろせ}あながちに乞^{こひはたり}微^{いと}き。かれその弟^{いろと}。しの十^{とつかつ}拳^ぎ劔^ぎをやぶりて。五百^い鉤^ほをつくりて。償^いひたまへども。取^{うけ}ず。また一千^{うけ}鉤^つをつくりて。つぐのひたまへども。受^うずて。なほかの正^{せい}本^{ほん}鉤^{かぎ}を得^えむとぞいひける。ここにその弟^{いろと}。海^{うみ}邊^べに泣^なうれひて居^いますときに。塩^{しほ}椎^{づち}神^{のかみ}來^きて問^{とひ}けらく。何^{いかに}ぞ虚^{そら}空^{つひ}津^だ日^な高^なの。泣^なうれひたまふゆゑ^いハととへば。答^{こた}たまはく。我^あ兄^あと。鉤^{つり}を易^{かへ}て。その鉤^{つり}を失^はひてき。かくてその鉤^{つり}を乞^{こひ}ゆゑ^いに。多^あの鉤^{つり}を償^いひしかども。受^うずて。なほその本^{もと}の鉤^{つり}を得^えむといふなり。故^か泣^なうれふとのりたまひき。ここに塩^{しほ}椎^{づち}神^{のかみ}。我^あ汝^な命^{のみこと}の爲^{ため}に。善^よこと議^ぎせむといひて。すなはち間^まなし勝^{かつ}間^まの小船^{ふね}をつくりて。そのふねにのせまつりて。教^{をし}けらく。我^あこのふねを押^{おし}ながさば。や^しや暫^{しま}往^{まい}ませ。味^{あじ}し御^う路^みあらむ。すなはちその道^{みち}に乗^{のり}て往^{いまし}なば。魚^{いろこ}鱗^なのごとつくれる宮^{みや}室^や。それ綿^{わた}津^つ見^み神^{のかみ}の宮^{みや}なり。

その神の御門にいたりましなバ。傍なる井の上に坐まさバ。その海の神の女。見ては
からむものぞとをしへまつりき。かれをしへしまに／＼。すこし行ましけるに。つぶさに
その言のごとくなりしかバ。すなはちその香木にのぼりて坐ましき。ここに海神の女。
豊玉毘賣の婢従。玉器もちて。水酌むとするとき。井に光あり。仰て見れば。うる
はしき壯夫あり。いと異奇とおもひき。かれ火遠理命。その婢を見たまひて。水を得し
めよと乞たまふ。婢すなはち水を酌て。玉器にいれてたてまつりき。ここに水をバ飲たま
はずして。御頸の璵を解して。口に含て。その玉器に唾いれたまひき。ここにその璵。器
に著て。婢たち璵を得離たず。かれ璵をつけながら。豊玉毘賣にたてまつりき。かれその璵
を見て。婢たちに。もし門の外に人ありやと問たまへバ。我井の上の香木の上に人坐。い
とうるはしき壯夫に也。我王にもまさりて。いとたふとし。かれその人。水を乞せるゆゑ
に。奉しかバ。水をバ飲ずて。この璵をなも唾いれたまへる。これ得離たぬゆゑに。入
ながらもちまゐ來て。たてまつりぬとまをしき。かれ豊玉毘賣命。あやしと思ほして。いで見て。
すなはち見感て。目合して。その父に吾門にうるはしき人有とまをしたまひき。ここに
海神みづからいで見て。この人ハ。天津日高の御子。虚空津日高にませりといひて。す
なはち内に率いれまつりて。美智の皮の豊八重をしき。また絶豊八重を。その上にしきて。
その上に坐まつりて。百取の机代の物をそなへて。御饗して。すなはちその女豊玉毘賣
を婚まつりき。かれ三年と至まで。その國に住たまひき。ここに火遠理命。そのはじめ
のこをおもほして。大なる歎一したまひき。かれ豊玉毘賣命。そのみなげきをきかし
て。その父にまをしたまはく。三年住たまへども。恒ハなげかすこともなかりしに。今夜大
なるなげき一したまひつるハ。もし何のゆゑあるにかとまをしたまへバ。その父の大神。
その聳の夫に問まつらく。今旦我女のかたるをきけば。三年坐ませども。つねハなげか
すこともなかりしに。今夜大なるなげきしたまひつとまをせり。もしゆゑありや。また
ここに到ませるゆゑハいかにぞととひまつりき。かれその大神に。つぶさにその兄の失
にし鉤を罰れるさまをかたりたまひき。ここをもて海神。こと／＼に海の大ものはた
の小魚を召あつめて。もしこの鉤をとれる魚ありやと問たまふ。かれももろ／＼の魚ど
もをまをさく。このごろ赤海鯉魚。喉に鰓ありて。物得食ずと愁なれば。かならずこれ取つら
むとまをしき。ここに赤海鯉魚の喉をさぐりしかバ。鉤あり。すなはち取いでて。清洗て。
火遠理命にたてまつるときに。その綿津見大神。をしへまつりけらく。この鉤を。その兄
に給はむときに。のりたまはむさまハ。この鉤ハ。淤煩鉤。須須鉤。貧鉤。宇流鉤といひ
て。後手に賜へ。しかしてその兄。高田をつくらバ。汝命ハ。下田をつくりたまへ。そ
の兄下田をつくらバ。汝命ハ。高田をつくりたまへ。しかしたまはバ。吾水をしれば。三年
のあひだ。かならずその兄。貧窮なりなむ。もしそれしかしたまふことを恨怨て。攻戰
バ。塩盈珠をいだして。溺し。もしそれうれひをまをさバ。塩乾珠をいだして活し。か
くして惣苦めたまへとまをして。しほみつ珠しほひる珠あはせて兩箇を授まつりて。す
なはちこと／＼に和邇魚をよびあつめて。問たまはく。いま天津日高の御子。虚津日高。上
つ國に出幸むとす。誰ハ幾日に送り奉て覆ごとまをさむととひたまひき。かれ各も己も。身
の長尋のまに／＼。日をかざりてまをす中に。一尋和邇。僕ハ。一日にをくりまつりて。還來
なむとまをす。かれその一尋和邇に。しからバ汝送り奉てよ。もし海中をわたるとき。

かしこまのり わに くびのせ
 な惶畏せまつりそと告て。すなはちその和邇の頸に載まつりて。お
 くりだしまつりき。かれいひしがごと。ひとひ 一日のうちに おくりまつ
 りき。その和邇返りなむとせしときに。佩せる紐小刀をとかして。
 その頸につけてなもかへしたまひける。かれそのひとひろわに 一尋和邇をバ。いま
 さいもちかみ わたのかみ
 まに佐比持の神とぞいふなる。ここをもてつぶさに海神のをしへし
 ことのごとくして。かの鉤ばりをあたへたまひき。かれそれよりの
 ち。いよよまづしくなりて。さらにあらしきころをおこして。せめくせめ
 迫來。攻
 むとするときハ。しほみつたま おぼら
 塩盈珠をいだして溺し。それうれひをませバ。
 しほひるたま すすく たしな のみ
 塩乾珠をいだして救ひ。かくして惚苦めたまふときに。稽頭まをさく。僕ハいまよりゆく
 さき。ながみこと よるひる びと
 汝命の夜晝のまもり人となりてぞつかへまつらむとまをしき。かれいまにいたる
 まで。そのおぼれしときの種種の態。たえずつかへまつるなり。ここに海神の女。
 とよたまびめのみこと まる あれ はらめ みこうむ
 豊玉毘賣命。みづから參でてまをしたまはく。妾はやくより妊身るを。いま産べきとき
 なり こ あまつかみ み こ うなはら うみ まめできつ
 に臨ぬ。此をおもふに。天神の御子を。海原に生まつるべきにあらず。かれ參出到とま
 をしたまひき。かれすなはちその海邊の波限に。うみへた なぎさき う は かや
 鵜の羽を葦草にして。産殿をつくりき。うぶや
 ここにその産殿いまだ葺合ぬに。御腹忍がたくなりたまひければ。産殿にいりましき。こ
 こに産まさむとするときに。その日子にまをしたまはく。すべて侘國の人ハ。産をりに
 なれば。もとくに うむなる あれ み うみ あを
 本つ國のかたちになりてなも産生。かれ妾もいまもとの身になりて。産なむ。妾
 な見たまひそと願たまひき。ここにその言を奇とおもほして。そのまさかりに産たまふ
 かきまみ やひろわに なり ほひもこよひ み
 を竊伺たまへバ。八尋和邇に化て。匍匐委蛇き。かれ見おどろきかしこみて。にげ退たま
 ひき。ここにとよたまびめのみこと かきまみ うら
 豊玉毘賣命。その伺見たまひしことをしらして。心はづかしとおもほして。
 み こ うみおき あれ うみつち とほし かよはむ あが
 その御子を生置て。妾つねハ海道を通して。往來とこそおもひしを。吾かたちをかきまみ
 たまひしがいとはずかしきこととまをして。すなはちうなさか せき かへ
 海坂を塞て。返りいりましき。こ
 をもてその産ませる御子の名を。天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命とまをす。しかれど
 あれ み こ みな あまつひだかひ こなぎさたけうがやふきあへずのみこと
 ものちハそのかきまみたまひし情をうらみつつも。戀しきにゑたへたまはずて。その御子
 ひたしまつ いろとたまよりびめ うた
 を治養るよしによりて。その弟玉依毘賣につけて。歌をなもたてまつりける。その歌。
 あかだまハ。をさへひかれど。しらたまの。きみがよそひし。たふとくありけり。かれそ
 の比古遅。こたひたまひける歌曰。おきつとり。かもどくしまに。わがみねし。いもハわ
 すれじ。よのごとに。ひこほでみのみこと たかちほ みや いほ やそとせまし みはか
 高千穂の宮に伍佰ちまり捌拾歳坐ましき。御陵
 ハ。やがてその高千穂山の西のかたにあり。この天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命。
 たかちほやま にし あまつひだかひ こなぎさたけうがやふきあへずのみこと
 みをばたまよりびめ みあひ うみ み こ みな いつせのみこと いなひのみこと みけぬのみこと
 其姨玉依毘賣に娶まして。生ませる御子の名ハ。五瀬命。つぎに稲氷命。つぎに御毛沼命。
 わかみけぬのみこと みな とよみけぬのみこと みな かむやまといはればこのみこと
 つぎに若御毛沼命。またの名ハ。豊御毛沼命。またの名ハ。神倭伊波禮毘古命四柱かれ
 みけぬのみこと なみ ほ ふみ とこよのくに まし いなびのみこと みはは くに うなはら ましき
 御毛沼命ハ。波の穂を跳て。常世國にわたり坐。稲氷命ハ 妣の國として。海原にいり坐也。
 ふることぶみかみつまきはり

